

「神の国に入る子どもたち—幼子のように神の国を受け入れる」

ルカ 18:15-17

2020. 6. 7 南与力町教会朝の礼拝

序：

今日の御言葉はマタイ福音書やマルコ福音書にも記されている有名なものです。また幼児洗礼の一つの根拠とされることもあります。主イエスが子どもたちをご自分のもとに招き、「神の国はこのよ
うな者たちのものである」と宣言されました。語られていること自体は簡潔で分かりやすいと思いま
す。しかしここには私たちが忘れてしまいやすいこと、それゆえに繰り返し思い起こすべきことが教
えられています。初代教会の人々も繰り返しこの主イエスの言葉に聞き続け、そうして三つの福音書
に記されるようになったのだと思います。

①乳飲み子を連れて来た人々と叱る弟子たち

まず 15 節にはこうあります。

「イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れて来た。弟子たちは、これを見て叱っ
た。」

他の福音書の並行箇所と比べますと、マタイやマルコでは「人々が子供たちを連れて来た」となっ
ています。一方、ルカでは「人々は乳飲み子までも連れて来た」となっています。「乳飲み子」とは文字
通り「生れたばかりの乳児、幼子」を意味する言葉です。そのようにまだ生まれて間もない「乳飲み子
さえも」人々はイエス様のもとに連れてきた、とルカは記しているのです。

そしてその目的は「イエスに触れていただくため」でした。当時、ユダヤ人たちは、自分の幼い子供
を高名なラビ、すなわちユダヤ教の先生のところへ連れて行って、手を置いて祝福してもらおうとい
うことをしていました。それゆえ「イエスに触れていただくため」というのは、イエス様に手を置いて、祝
福していただくため、ということです。イエス様はこれまで多くの病人に触れて、病気をいやしてこ
られました（ルカ 5:13、6:19）。今日のところで乳飲み子を連れてきた人々はおそらく子どもの母親や父
親だと思いますが、その人々もイエス様のそのような評判を聞いていたのだと思います。ですから、
「そのイエス様に我が子も触れていただきたい、そうして祝福していただきたい」と考え、自分の子
どもをイエス様のもとに連れてきたのです。これは幼い子を持つ親の心としてよくわかることだと思
います。

しかしそのように乳飲み子を連れて来た人々を見て、弟子たちは叱りました。なぜ叱ったのでしょ
うか。その理由は述べられていませんが、おそらく弟子たちはイエス様のためを思って人々を叱ったのだ
と思います。イエス様の主な活動は、神の国の福音を宣べ伝えること、そして病人をいやすことで
した。その働きのために多忙な日々を送っておられたのではないかと思います。そのイエス様のところ
に、人々は「乳飲み子までも」連れてきたのです。イエス様の側にいた弟子たちからすれば、「乳飲み
子」のことで、これ以上イエス様を煩わせてはいけない、面倒をかけてはいけない、と思ったのでし
ょう。乳飲み子は、イエス様の説教を聞いても理解することはできません。また病人のようにいやして
もらう必要性や緊急性があるわけでもないのです。弟子たちからすれば「乳飲み子」はイエス様の大切な

働きのじゃまをする存在に思えたのかもしれませんが。そうして弟子たちは乳飲み子までも連れて来た人々を叱ったのです。

②幼子をご自分のもとに招かれるイエス様—問われる幼子への見方

しかしイエス様はどう言われたでしょう。16節には次のようにあります。

「しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」

弟子たちは乳飲み子をイエス様のもとに連れて来た人々を叱ったのですが、イエス様はむしろ乳飲み子をご自分のもとに呼び寄せられたのです。そして言われました。

「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。」

弟子たちはイエス様のためを思って人々を叱ったのですが、実はそれはイエス様の御心にかなわないことでした。イエス様は乳飲み子をご自分のもとに招こうとしておられる、そして手を置いて祝福したいと願っておられるのです（マコ 10:16）。だから、「幼子たちがわたしのところに来るままにさせなさい。その子たちを妨げてはならない」と言われました。そしてその理由として「神の国はこのような者たちのものである」とイエス様は言われました。

教会では日曜学校を行なっています。また中会や大会では子どもたちのためのキャンプを行なっています。それは「子供たちをわたしのところに来させなさい」と言われたイエス様の御心にかなうものであり、大切な働きだと思います。しかし、その一方で、このイエス様の言葉によって、私たちは自分が子ども、幼子をどのように見ているのか、ということに改めて問われるのではないかと思います。私たちは子どもたちへの伝道・教育ということを考えます。子どもたちにもイエス様の福音、神様の言葉を伝えるために日曜学校をし、夏のキャンプ等も行なっているのです。それ自体は大切なことです。しかし、ではまだ御言葉を理解できない「乳飲み子たち」はどうなのでしょう。そういう乳飲み子たちはまだ教会に来なくてもいい存在なのでしょう。生れたばかりの赤ちゃんは礼拝に出ても説教が理解できるわけではありません。お祈りも献金もできませんし、賛美歌も歌えません。そのような乳飲み子、幼子たちを教会の礼拝に連れてくる意味はどこにあるのでしょうか。そういう子どもたちは礼拝に連れてくる必要のない存在なのでしょう。そうではないのです。そうではない、ということにイエス様は今日の箇所でおっしゃっています。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」と言われるのです。

私たちは教会の中に、そして礼拝の中に、イエス様をご臨在くださっていると信じています。それはイエス様ご自身が、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ 18:20）とおっしゃっておられるからです。そしてそのイエス様が子どもたちを、乳飲み子さえもご自分のもとに来させない、と招いておられるのです。このイエス様に触れていただくため、祝福していただくために、親は子どもを教会に連れてくるのです。そしてそのことを弟子たちは、教会の大人たちはじゃましてはならないのです。もちろん子どもというのは泣いたり、騒いだりします。静かに礼拝をしたい大人たちにとっては時に煩わしい存在に思えることがあるかもしれません。

しかし教会の只中におられるイエス様ご自身が「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」とおっしゃっている。このことを私たちは心に留め続ける必要があります。

ではなぜイエス様は「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」とおっしゃるのでしょうか。その理由としてイエス様は「神の国はこのような者たちのものである」とおっしゃっています。神の国はまさにこのような者たち、幼子や乳飲み子のような者たちのものである、とイエス様は言われました。そして神の国に入るものとして幼子たちを祝福したいとイエス様は望んでおられたのでしょう。実際、マルコ福音書 10 章 16 節を見ますと、イエス様は「子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された」と記されています。そのためにイエス様は幼子たちをご自分のものに招かれたのです。

私たちも弟子たちのように、幼子をまだ半人前の不十分な存在と考えがちかもしれません。幼い子供はまだ福音を理解できず、悔い改めたり、信仰を持ったりすることもできない。そういう意味では神の国に入るにはまだ不十分な存在であり、成長して信仰告白をしてはじめて正式に教会の一員、神の国の一員と認められる。そのように考えている節があるのではないのでしょうか。もちろん子どもが成長し、自分の口で「イエスは主である」と信仰の告白をすることは大切なことです（ロマ 10:9-10）。親も教会もそのことを目指し、そのことを願って、子どもに信仰教育をします。それは必要なことです。しかし、ではまだ信仰を自分の口で告白できない幼子や乳飲み子は、神の国に入れられないのかということそうではありません。むしろ、イエス様は「神の国はまさに乳飲み子のような者たちのものなのだ」と言われたのです。これを聞いた弟子たちは驚いたことでしょう。しかしそれは一体なぜなのでしょう。なぜ、まだ説教を理解できず、悔い改めたり、イエス様を信じたりすることもできないような乳飲み子が神の国に入ることになるのでしょうか。

③幼子のように神の国を受け入れる

イエス様は 17 節で次のようにおっしゃっています。

「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

この言葉は、子どもが神の国を受け入れている、ということが前提とされています。幼子は確かに神の国の福音を聞いて理解することはできなのですが、そうであっても幼子はすでに神の国を受け入れることができている、ということです。そしてその幼子のように神の国を受け入れない者は誰でも、決して神の国に入ることはできない。そのようにイエス様はおっしゃったわけです。

ここにおいて、子どもを不十分で未熟な存在と考える弟子たち、また私たちの見方が完全に覆されています。イエス様は、神の国にはまず大人たちが入り、そして子どももおまけとして入ることができる、と言われたわけではありません。大人であっても、幼子のように神の国を受け入れるということがなければ、決してそこに入ることはできない、と言われたのです。すなわち、神の国に入るにあたっては、幼子は不十分で未熟な存在などではなく、むしろ私たちが見習うべき存在、模範とすべき存在なのです。

もちろんそれはすべてにおいて子どものようになれ、子どもっぽくなれ、ということではありません

(I コリ 14:20 参照)。また子どものように純粹無垢になれ、ということでもありません。聖書に従えば幼子にも罪はあります(創 8:21)。イエス様がここで子供を見習うようにと言われるのは、「子供のように神の国を受け入れる」という点においてです。では「子供のように神の国を受け入れる」とは一体どういうことなのでしょう。

「神の国を受け入れる」と言うとき前提にされていることは、神の国はすでに差し出されている、ということです。イエス様は「神の国はいつ来るのか」と尋ねたファリサイ派の人々に次のように答えておられました。

「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」(ルカ 17:20-21)

神の国とは見えないけれども、実は「あなたがたの間にある」、「あなたがたの只中にある」とイエス様は教えられたのです。神の国、神のご支配は、見えない形ですが、イエス・キリストによってもたらされた、到来したのです(ルカ 11:20 参照)。そこで私たちに問われるのが、その神の国、神のご支配を私たちが受け入れるか拒否するか、ということです。そして子どもたち、幼子たちは、自然とそれを受け入れている、と言われるのです。幼子はそれを頭で理解し、「受け入れよう」と考えて、受け入れているわけではありません。ただ自然と、本能的に受け入れているのです。この「受け入れる、受け取る」ということにおいて私たちは幼子に倣う必要があるのです。

子どもは私たち大人とは違った仕方です。例えば、日曜学校ではクリスマス会や夏のお楽しみ会をする時、案内のティッシュをはりまや橋小学校の前で配るようにしています。最初に低学年の子どもたちが出てくるのですが、低学年の子たちはだいたいティッシュを受け取ってくれます。喜んでくれる子もいますし、何だろうと思いつつも受け取ってくれる子もいます。しかし、高学年になるに従い、受け取ってくれなくなります。怪しい目で見られたり、「結構です」とはっきり断られることもあります。そういうよくわからないものは受け取っちゃいけないという大人の知恵がついてくるのだと思います。私自身、イオンで案内ティッシュを配っている時は、勧誘されるのが嫌なのであまり受け取りません。しかし幼い子供はそんなことを考えず、差し出されたものを素直に受け取るのです。

乳飲み子もそうでしょう。目の前に差し出されたおっぱいを本能的に吸います。私が次男を抱っこしていると、私の腕をちゅぱちゅぱなめている時があります。腕であろうと指であろうと、口に触れたものは何でもなめてしまう、吸ってしまうのです。そのように幼子は、無心に差し出されたものを受け取ります。

大人はこういうことがなかなかできません。いろいろ考えたり、遠慮したりして差し出されたものを断ることがあります。しかし、「神の国を受け入れる、受け取る」ということに関しては、私たちは幼子になる必要があるのです。逆に言うと、大人になると「神の国」も受け取らない、「いません」と断ることが出てくるのだと思います。

幼い時は、自然と神のご支配を受け入れている。乳飲み子が母の腕に身をゆだねるように、見えざる神の御腕に身を委ねているのです。しかし成長すると、子どもは親から自立するようになります。そして多くの人は神様からも自立しようとするのです。神様のご支配などなくても、自分の力で生きていける。あるいはお金さえあれば生きていけると考える。そうして父なる神様のご支配を拒み、そこから離

れ、自由になろうとする。それはイエス様が語られたあの放蕩息子の姿でもあります。神様なんかいなくても、神様に頼らなくて自分で生きていけると思うとき、私たちは神の国、すなわち父なる神様のご支配を拒んでいる。受け取り損なってしまいます。そしてそうであるならば、「決して神の国に入ることはできない」のです。

また「幼子のように神の国を受け取る」というとき、幼子は代価を支払おうとしないということも重要なポイントだと思います。大人は何かを受け取るにしても、代価を払おうとすることがあるのだと思います。誰かから何かをあげると言われても、ただでもらうわけにはいかないのです、代金を払います、と言うことがあるでしょう。しかし幼い子供はそういうことはしません。代価を支払おうとするのが大人の受け取り方かもしれません。しかし「神の国」を受け取るにあたってはそれではだめなのです。この箇所の後に出てくる「お金持ちの議員」はイエス様に次のように尋ねています。18章18節「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」。

すなわち、この人は何かをすれば永遠の命を受け継ぐことができる、神の国に入ることができる、と考えているのです。今日の箇所の前に出てくるファリサイ派の人もそうでした。彼は神様に対して自分はこれほど正しい人間だ、正しいことをしてきたとアピールしています。それゆえに自分は神様から正しいと認められ、神の国に入ることができると考えていたのだと思います。

しかし、そのようなファリサイ派の人、また後に出てくる金持ちの議員も、そのような考え方をしている限り、神の国に入ることはできないのです(18:14, 24-25)。それは言わば、代価を払って神の国を受け取ろう、あるいは買い取ろうとする姿勢です。それは誠実であるように見えますが、実は神の国を受け入れる姿勢としてはふさわしくないのです。なぜならイエス・キリストがもたらされた「神の国、神のご支配」は全く恵みによって、無償で差し出されているものだからです。私たちはそれに対して代価を支払う必要はありません。神様の前に功績を積む必要はないのです。なぜなら代価はイエス・キリストがあのかの十字架上で、ご自分の命をもって完全に支払ってくださったからです。ですから私たちはただ「幼子のように」差し出された神の国を素直に受け入れればよいのです。

結論：

私たちに差し出されている神の国・神のご支配とはどのようなものでしょうか。イザヤ書46章3節4節には次のようにあります。お聞きください。

「わたしに聞け、ヤコブの家よ／イスラエルの家の残りの者よ、共に。あなたたちは生まれた時から負われ／胎を出した時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで／白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。」

神様は私たちが生まれた時から、母の胎を出した時から、私たちが背負い、担ってきてくださいました。それと同じように神様は、私たちが老いる日まで、白髪になるまで、私たちが背負って行ってくださる。神様ご自身が「わたしが担い、背負い、救い出す」と言ってくださるのです。私たちは、そのような神の恵みのご支配を受け入れ、身を委ねればよいのです。先ほどお読みした詩編131編2節で詩人は言っていました。

「わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように／母の胸にいる幼子のようにします。」

私たちも母の胸に抱かれる乳飲み子のように、神様の胸の中に、その愛と恵みのご支配に身を委ねたいと思います。それが「幼子のように神の国を受け入れる」ということです。そのようにする者を神様は喜んでくださり、ご自分の御国へ入れてくださるのです。お祈りをいたします。

祈り

神様、私たちは、あなたによって造られ、母の胎を出た時からあなたによって担われ、生かされてきました。しかし私たちは成長するに従い、そのあなたのご支配を素直に受け入れず、自分の力で、あるいはあなた以外のものに頼って生きていこうとしてしまう愚かなものです。どうぞ私たちが、幼子のように、乳飲み子のように、あなたの愛と恵みのご支配を受け入れ、身を委ねて生きていくことができますように。そうしてあなたの御国に入ることができますように。幼子のような心を私たちに与えてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。